



鉄と、饅えた脂肪の混じり合った悪臭が、閉め切られた空間に淀んでいる…渋谷区宇田川町にある、かつては流行の衣服が並んでいた商業ビルの三階。そこは今や、生きながら腐敗しつつある人間の肉塊を詰め込んだ、巨大なゴミ箱へと成り果てていた。

人々が目を逸らすように隔離したその背うペースは、割れたガラス窓は内側から段ボールと粘着テープで無造作に目張りされ、外の光を頑なに拒絶している。わずかな隙間から差し込む灰色の日差しが、床に転がる無数の「元・人間」の影を不気味に浮かび上がらせていた。「痛い…痛いよお…。」

暗がりのあちこちから、ねっとりとした呪詛のような呻きが聞こえる。

床のリノリウムは、流された血と体液が乾燥して硬化し、歩くたびに靴の裏がベタベタと嫌な音を立てて張り付いた。剥き出しのコンクリートの壁には、逃げ惑う指が擦りつけられたのだろう、赤黒い手形が幾筋も、まるで這いずる百足のように尾を引いている。

ここに逃げ込んだきた民間人たちの姿は、目を覆いたくなるほどに悲惨だった。

まともな医療物資などあるはずもない。包帯の代わりに引き裂かれた汚れたTシャツを巻き付けただけの傷口からは、黄色い膿が溢れ出し、既に蠅が卵を産み付けている。ある男は、膝から下を完全に失っていた。鋭利な刃物ではなく、何か巨大な力で「引きちぎられた」ような肉の断面からは、白く濁った大腿骨の破片が覗いている。彼は狂うことも許されず、ただ乾いた唇を震わせ、虚空を睨みつけていた。

彼らをこの地獄に叩き落としたのは、他でもない。数日前まで「神の使い」と崇められていた、あの白美しく輝く天使が呼び寄せ、天使から着けて白い首輪をした悪魔達だった。

「お母さん、大丈夫よ、すぐ楽になるから……お姉ちゃんも、笑って。」

隅のほうで、虚ろな目をした少女が、すでに事切れて冷たくなった母親の首筋を、血塗れのハサミで何度も何度も突き刺していた。その顔には、狂気ともつかない、気味の悪いほどの「純粋な笑顔」が張り付いている。

天使たちがもたらした「救済」は、洗脳という名の絶対的な倫理の破壊だった。

白い首輪を嵌められた人間たちは、最愛の家族の肉を削ぎ落としながら、各宗教の聖典の一節を狂信的に唱えていたという。

全体より大きな善のため。個人の尊厳など、神の調和の前には塵に等しい。彼らは自らの手を血で染めながら、それが至高の愛であると信じ込まされていたのだ。隣で眠っていたはずの夫が、突如として笑顔で包丁を突き立ててくる恐怖。

裏切りではなく、純粋な善意によって解体されていく我が子を見つめるしかなかった母親の絶望。

そのじっとりとした心理的恐怖が、生き残った者たちの精神を内側から確実に蝕み、この部屋全体の空気をドス黒く濁らせていた。

皮膚にまとわりつく、汗と脂と死臭の熱気。エアコンの死んだ密室の温度は、人間の体温だけで不快に上昇し、吸い込む空気が肺の奥をチリチリと灼く。

痛覚だけが、自分がまだ生きていることを証明する唯一の指標だった。

悲惨な状況であるが、巻き込まれた地域には行政職員が多数いた事が幸いした。

彼らが、自身の感情を殺し、急ごしらえであるものの避難所の体を整える事により文化という獣と人とを分ける精神的な境界を作れた。

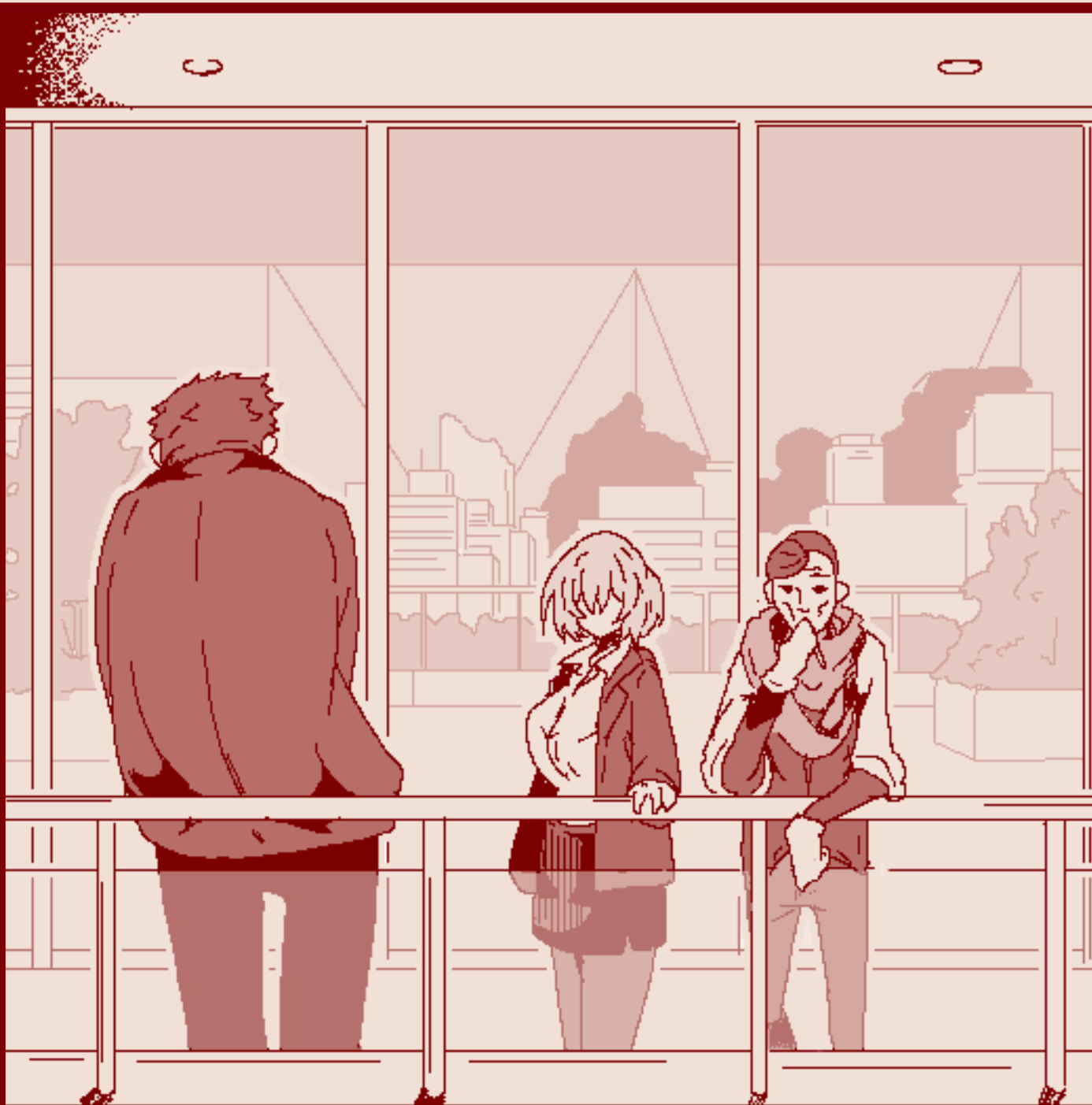
避難所外部の物理的な境界としてでは、ビルの外、コンクリートの照り返しと雨雲が混ざり合う暗い路上。

そこには、民間人の避難所を最悪の結末から守るため、沈黙の壁として佇む巨大な影があった。

ダイナモン…その巨体は、まるで重戦車がそのまま生物の形を成したかのような圧倒的な質量感を放っている。火花を散らす装甲の

隙間からは、いつでも周囲の空間を灰にすべく、超高熱の熱気が陽炎となって立ち上っていた。輝く装甲を纏ったクーレスガルルモン達…デジモンという生命体の枠を超え、歩く大量破壊兵器そのものだった。

そこしの空白を突いて這い寄る天使の斥候を、その光学センサーは確実に捉えて離さないようにし、この避難所を守護していた。



ザザ…ザ、ジジ…、無機質な砂嵐の音が、暗い部屋の中にじっとりと響き渡っていた。

渋谷警察署の地下、臨時に設けられた通信班の室内は、電子機器の発する熱と、隊員たちの発する濃厚な冷や汗の匂いで満ちている。

「こちら渋谷署特設対策本部！本庁、応答せよ！……クソ、また駄目か。完全に遮断されてる」無線機のマイクを握りしめる隊員の指先は、過度の緊張で白く強張っていた。

液晶画面のアンテナマークは一本も立たず、世界から切り離された恐怖が、じわじわと彼らの正気を削り取っていく。だが、真の絶望は、この通信が「完全に死んでいない」という点にこそあった、ビコン、と電子音が鳴る。一瞬だけ、電波妨害の隙間を縫って、隊員の個人のスマートフォンにメッセージが滑り込んできた。

『今どこ？家の前の通りを、白い羽の怪物が歩いてる。隣の鈴木さんが、笑いながら自分の首をナイフで——』文字はそこで途切れていた、慌てて返信を打ち込もうとしても、次の瞬間には再び画面が『圏外』へと切り替わる。通話ボタンを押しても、受話器から聞こえるのは、まるで底なしの沼から湧き上がるような、不気味な不連続ノイズだけだった。

「繋がるかもしれない」という残酷な希望が、彼らの神経を通信機へ釘付けにさせ、磨り潰していく。それは、内部の凄惨な絶望を外へと漏らし、同時に内側の人間を精神的に監禁するための、冷酷な戦術的計略だった。

場面は変わり、重苦しい空気が漂うビルの二階。

外の喧騒から隔絶されたテラスが見える窓際で、安所は手すりにもたれかかりながら、濁った灰色の空を見上げていた。その隣には、大吾と紋十郎が、それぞれ押し黙ったまま佇んでいる。

「虐殺の開始から、今日で丸三日、ですか。」

安所が、硬く冷たい声で呟いた。

その視線は、手元の戦術端末ではなく、ガラスの向こうの無人の街並みに向けられている。

「ええ。LINEや電話、ありとあらゆる通信が遮断されている…だが、タチが悪いのは、時折その妨害が意図的に緩むことだ。おかげで、中にいる連中は通信を確保しようと躍起になり、余計な神経を割かれる。そして同時に、内部の凄惨な情報だけが、確実に外部へと拡散されていく仕組みになっている…敵の心理戦だな。」

安所の冷静な分析に、紋十郎がふんと鼻を鳴らした。彼の顔には、隠しきれない疲労と憤怒がべったりと張り付いている。

「通信が完全に途絶する前、俺たち電捜課は本庁の上層部と連絡を取り合っていたんだ。だが、あの腰抜けどもは、天使の軍勢が『自分たちでどうにかするから動くな』と言ってきた言葉を、文字通り真に受けやがった。」

紋十郎は手すりを拳で強く叩いた。鈍い金属音がテラスに響く。

「身動きを封じられたまま、民間人が殺されていくのを黙って見ていろ、だと？そんな命令に従えるかよ。反発したら、あの上の連中どもは、電捜課の全員を一発で警察官資格をはく奪しやがった。今や俺たちは、守るべき組織すら失った若年者から中年までのニートの寄り合い所帯だ。」

「それだけじゃねえ。この街を囲む隔離の壁、内側からは絶対に出られないくせに、なぜか外部からの侵入だけは可能なんだ。そのせいで、何が起きてる。興味本位で首を突っ込んできた不屈きなデジチューバーだの、特ダネを狙うマスコミ関係者どもが、そろそろと入り込んでやがる…!あいつら、自分たちが安全な安全圏にいるとでも錯覚してんのか、この避難所でも態度が最悪だ。」

飯が不味いだの通信を繋げだの、自分たちの仕事を増やすことしか考えてねえ。ヘドが出るぜ!」

一息ついた紋十郎は、眼光を安所に向けた。

「……それにしても、安所さん…お前たち自衛隊は、世間じゃすっかり市民を虐殺する悪者扱いされてる。よくもまあ、そんな状態で部下を引き連れて、この避難所に入ってくれたもんだな。周囲の視線が怖くはなかったのか?」

「警察の人間だと偽って、紛れ込んだのですよ。本当は、内部の警察組織と正式に連携を取りたい。だが、今の自衛隊に対する不信任は根深い。まともに交渉を試みれば、情報の空白の中で同士討ちになりかねない。だから現在は、こうしてゲリラのように潜伏し、襲来するデジモンを各個撃破しつつ、内部に残っている我々の隊長たちが、慎重に警察側とのコンタクトの機会を窺っているのです。」

安所その脳裏には、全く別の「不確定要素」に対する疑念が、黒いインクのように広がっていた。

(一日野勇太)

安所は内心で、その少年の名を反芻した。

彼が発揮する能力は、通常のフェアリモンのそれとは明らかに異質だった、風を単なる飛び道具として放つのではない。まるで自らの手足の延長線上のように、皮膚感覚で完全に制御している…さらに、彼がフェアリモンの脚を発現させた際のデータ組成、それは、通常のスピリットエヴォリューションを行った人間とは、根本的に異なっていた。人間の肉体をベースにデータを纏っているのではない。彼の脚の組成そのものが、限界までデジモンに近い、生々しいデジタル生命体のそれへと変質していたのだ。

(あれは、本当に人間の領域に留まっているのか…?)

底知れない生理的嫌悪感と、生物としての禁忌に触れたような心理的恐怖が、安所の胸の奥で、じっとりと冷たく渦巻いていた。





「…で、結局のところ、あのTEZの内部にいた三人は何だったんだ？」

紋十郎が声を落とした。彼の視線の先には、敵の核心にいたタイマーたち…安藤 琴音、篠原 誠司、渡辺 直人の影があった。

その問いに、安所が答える。

「恐らく目的は2つ。

内壁内…呼称としてコロニー内に侵入し、妨害を試みる我々のようなタイマーを狩ること。そして、デジモンの呼び寄せ等に使ってるシオンへのゲートを物理的に死守する防衛壁としての機能でしょうね。

偵察部隊の情報でゲート前に渡辺 直人とムゲンドラモン…タイマーの死体の付近で安藤 琴音、篠原 誠司達の姿を確認しました。」

「トクリュウの幹部頭の渡辺と家出少女の安藤…それと。」

大吾は安所の報告にもどこか上の空で、深い思考の底へと沈み込んでいた。

その横顔に刻まれた、割り切れない苦渋の皺に紋十郎の鋭い眼が止まる。

「おい、大吾。お前、何か知っているな、あの男達のことを。」

沈黙が流れた。人間の内面に潜む執着や悪意をジワジワと炙り出すような濃密な静寂の中、大吾はゆっくりと澁んだ空気を吐き出すように呟いた。

「…篠原さんの事なら…彼とは、かつて捜査一課の時に、共同捜査で一緒に動いた時期がありました。」

大吾の口調は静かだったが、その言葉には確かな重みがあった。

「彼は元々、神奈川県警の非常に優秀で、誰よりも正義感の強い刑事でした。

数年前、匿名・流動型犯罪グループを検挙したのですが、それがすべての引き金になってしまった。

組織から逆恨みされ、あろうことか、身内の刑事が弱みを握られて彼の家族の情報を漏洩してしまったのです。

…結果、篠原の妻と、まだ六歳だった娘…雅ちゃんは、構成員たちに無残に命を奪われました。

私も検死に立ち会いましたが、誠司さんには悪いがあれば人ではない…肉の塊だった。」

大吾の糸目が、苦痛に僅かに歪む。

「それでも彼は、血を吐くような思いで気丈に振る舞い、捜査を続けました。

しかし、その毅然とした態度が世間には冷酷と映り、被害者の様に振舞わないと。

SNSを中心に根も葉もないバッシングが吹き荒れました。

気丈に振舞っていましたが、犯人逮捕後に辞職したまでは…まさか奴らの組織にいたとは…。」

大吾の言葉には、かつての戦友への哀惜と、信じていた正義が裏返ったことへの嫌悪が混ざっていた。

その一途な苦悩を、紋十郎は冷めた笑みとともに切り捨てた。

「分からないさ、大吾…お前みたいに真っ直ぐで、一途な木念仁にはな」

紋十郎の言葉には、諦念が乗っていた。

「思い出したぜ篠原 誠司…一時期ニュースでもあいつが真犯人みてえな風潮で報道されてた

時あったな…しかも結局は暴行致死…犯人が馬鹿すぎて殺意の認定はされなかったってな。

正義感が強ければ強いほど、それが理不尽な現実によって裏切られた時、振り子は逆側に振り切れる。

背負うものが多すぎたんだよ、そいつは。

結局その重さの分潰れちゃったんだよ。」

手すりを握る紋十郎の指先に、じわりと血の気が引くほどの力がこもる。

「色々と背負い込むことも、世界の理不尽に抗い続けることも…全部に疲れて、何も考えたくなくなる。

正しいか間違っているか、そんな判断を

自分の頭で行うことすら、吐き気がするほど億劫になるもんだ。」

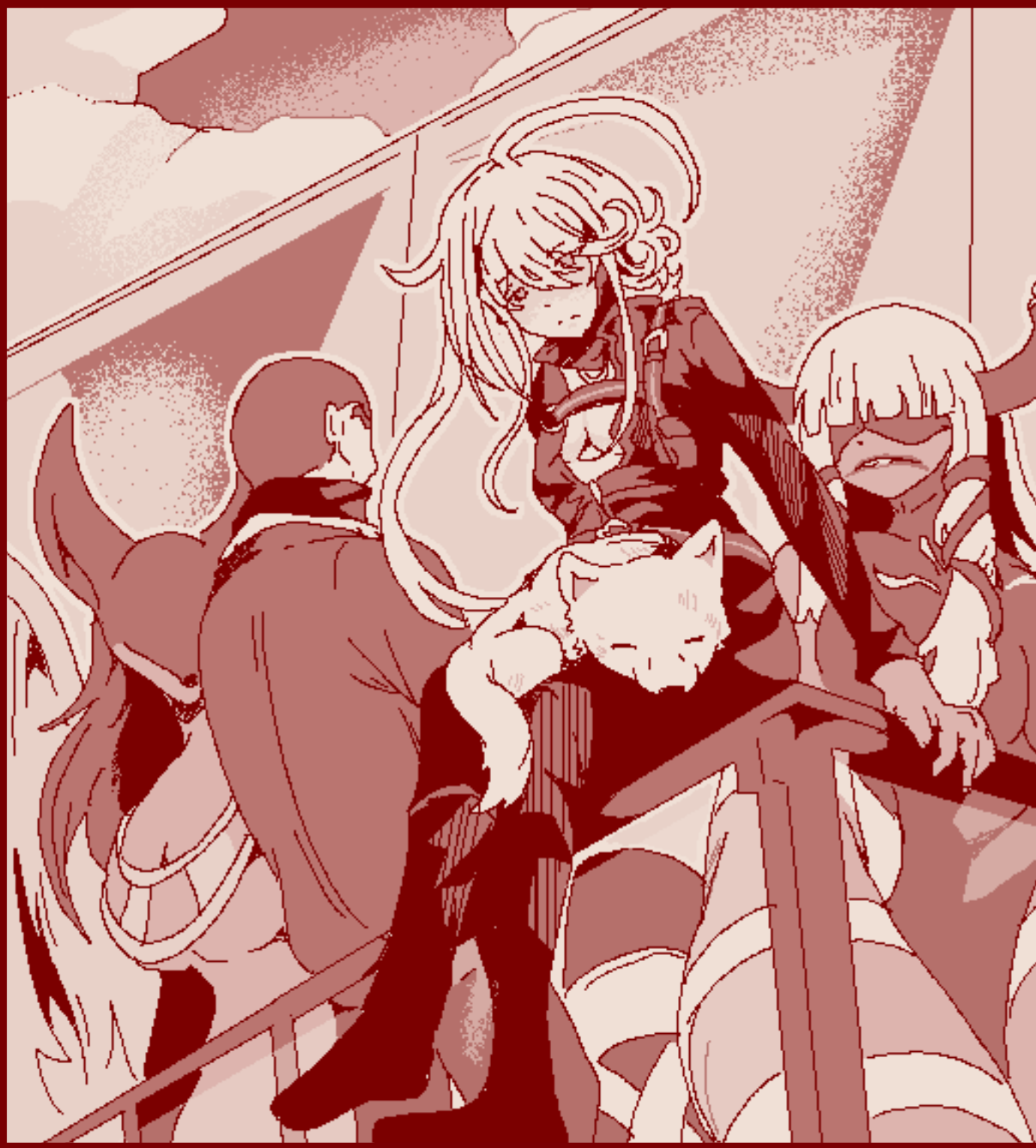
それは誠司への理解ではなく、紋十郎自身の内面にある脆さの告微だった。

考えることを放棄し、絶対的な秩序という甘美な檻に身を委ねなくなる人間の弱さが、生々しい温度を持ってそこに横たわっていた。

「何もかもを放り出して、大きな波に吞まれた方が楽になれる。

…その気持ちだけは、俺には痛いほど解るよ」

紋十郎のしみじみとした呟きは、雨の匂いを孕んだ湿った風に流され、暗い避難所の天井へと消えていった。



丁は、その錆びた柵に細い身体を預け、膝の上にデジマルを乗せていた。柔らかい毛並みに指を沈めながらも、その視線は虚空を見つめ、内面の毒を反芻している。「…そんな風に、どこか他人事でいられるのが羨ましいよ。本当にさ」湿気を含んだ声が、テラスの重苦しい空気を震わせる。他人の無防備な部分を抉り出すような雰囲気であった。

柵のすぐ傍らには、宗介が背中をもたれ掛けさせていた。彼の視線は、情報の空白に満ちた灰色の街並みに向けられているようであった。

まるで影そのものが肉体を得たかのような異形の存在が控えている。死の天秤を司るアヌビモンは、彫刻のように微動だにせず、冷徹な眼光で空間を支配し、蜘蛛の化身たるアルケニモンは、長い四肢を不気味に蠢かせ、ケレン味のある戦闘の予感を感じさせるように、楽しげに火花を散らすような爪を鳴らした。

「しょうがねえだろ。」宗介の声には、乾いた感情だけがあつた。

「ただ、現実を見ているだけだ。日野少年の現状をな。あいつは今、まともな精神を保てる境界線の上にいる。」

周囲の環境がそれを許さないんだ。」

丁はデジマルの頭を撫でる手を無意識に強めた。勇太の今の環境は、凄惨という言葉すら生温い。寝たきりになり、突発的に狂暴化して暴れる親。

その介護という終わりのなき底なし沼に足を取られながら、あいつは民間人を救うために、すみれたちと一緒に救助活動に従事している。皮膚感覚は、常に疲弊と痛覚に満ちているはずだった。

「恋夜君がね、自分の過去を重ね合わせているみたいなんだ」丁の口から漏れたのは、他者への歪んだ同情の響きだった。

「あの子、勇太君のここに行って、介護を手伝っているよ…放っておけないって。でもね、それって本当にあの子のためなのかね。」

傷を舐め合って、自分が救われたいだけなんじゃないかって…。

見ていて、胸の奥がじっとりとしたもので満たされるよ。」

「だが、俺たちはその少年をさらに地獄へ突き落とそうとしている。」

シオンから強制離脱させられた後は、デジタルゲートは完全に閉ざされ、情報の空白が広がっている。

今や、シオンに選ばれた日野少年だけが、あの世界への門を開く唯一の可能性…あいつを戦いに駆り出さなきゃなきゃいけねえ。」

「…大人のエゴだね」丁は自虐的な笑みを浮かべた。

自分たちの無力さを柵に上げて、十二歳の子供に世界の命運を押し付ける。あの子が今どんな地獄を見てしようと、関係ない。利用できるものはすべて利用する。その冷徹な判断は、這い寄る嫌悪感となって彼女の胸にこびりついて離れなかった。

「それに…茜ちゃんのことだってそう。」

あの子の視線を見ればわかるよ。だけど、自分が想う相手が、壊れていくのをただ見守るしかないなんて。」

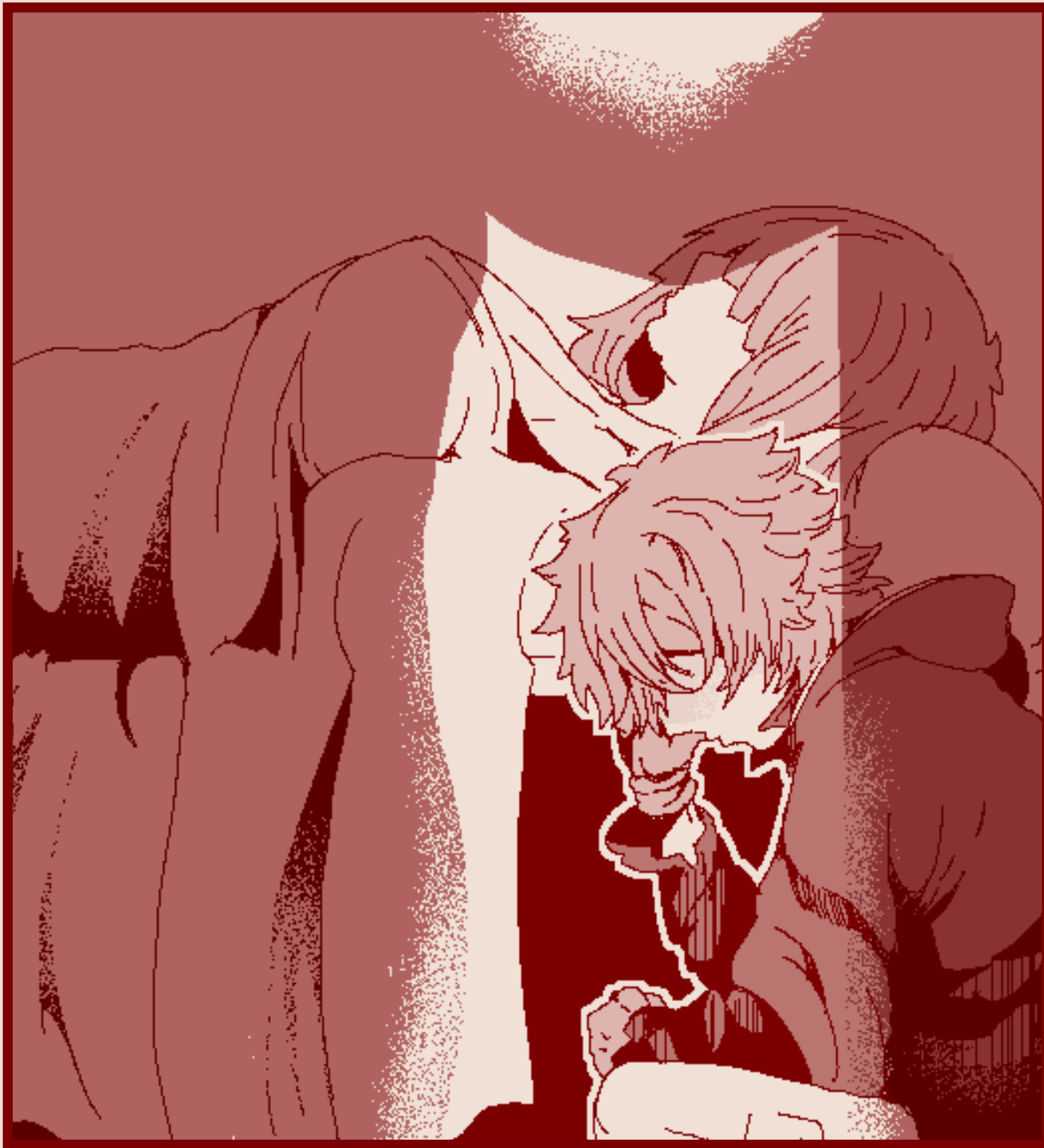
丁の視線が宗介を射抜く。

しかし、宗介は眉ひとつ動かさず、ただ怪訝そうに首を傾げた。「そうなの？」その徹底的な鈍感さに、丁は深い溜息を吐き出した。

「本当に、これだからおっさんは嫌ね…ねえ？」後ろで不気味に爪を弄んでいたアルケニモンが、甲高い声をあげて身体を揺らし、嘲笑をテラスに響かせた。「ひゃはは！本当にねえ、宗介！あんたって男は、女の心の機微ってやつがさっぱりわかつちやいないのかい？ 蜘蛛の巣に引っかかった獲物の足搔きの方が、まだ分かりやすいってものさ！」

怪物の嘲笑が、灰色の空へ吸い込まれていく。そのケレン味のある光景の裏で、エゴが、確実に彼らを蝕んでいた。





重苦しい扉が、油の切れたような不快な音を立てて横にスライドした。

すみれが足を踏み入れたその個室には、消毒液の匂いと、人間の恐怖が生み出した脂汗の混ざり合った、じっとりとした不気味な熱気が立ち込めている。

そこは、天使の軍勢によって白い首輪…コンセクレーションリングを嵌められ、辛うじて救出された人々が隔離されている場所だった。 リングの強制的な洗脳からは解放されたものの、魂の芯を激しく損なわれた彼らは、虚ろな目で壁を見つめるか、突発的な狂気への怯えに身を震わせている。

部屋の奥に漂う生理的な嫌悪感と、情報の空白がもたらす底知れない絶望。それは、生存者たちの皮膚感覚に直接這い寄るような、心理的恐怖だった。

すみれの視線は、部屋の片隅、昏い影が落ちる壁際に注がれる。そこには、十二歳の少年にはあまりにも過酷な質量に押し潰されそうになりながら、床にしゃがみこんでいる日野勇太の姿があった。

勇太は片腕で己の頭を強く押さえつけ、まるで脳内に直接響き続ける理不尽な呪詛をせき止めようとするかのように、深く、深くうなだれている。

その小さな手の平の隙間から覗くデジヴァイスD-3には、無残なヒビ割れが刻まれており、少年の内面の痛覚を体現しているかのようなだった。

勇太の思考の底では、どす黒く繊細な感情の澱が、じわじわと反芻されていた。なぜ、俺の家族がこんな目に遭わなきゃならないんだ。コンセクレーションリングという異常な倫理観の首輪を嵌められ、正気を奪われて獣のように暴れた実の父親。

その無残に壊れ果てた姿を目の当たりにしたことで、勇太の胸の奥には、あるひとりの男の影が狂暴にそそり立っていた。

光の父親であり、すべてを冷徹に見下ろす圧倒的な存在、渡辺直人。

あの男の持つ、子供の足掻きなど歯牙にもかけない絶対的な権威と冷酷さは、以前から何度も目にした自身を制圧する人間いつかこの手で必ず打倒し、引き摺り下ろさねばならないそのものだった。

壊れてしまった実父の無力さと、目の前に立ちはだかるあの男…大人、身勝手の制圧者の壁。

その圧倒的な格差に対する激しい劣等感と、それを完膚なきまでに粉砕してやりたいという飢えた破壊衝動が、勇太の心を鋭く研ぎ澄ましていく。

理不尽な世界への激しい怒りが、皮膚を焦がすような熱となって身体を巡る。

「…勇太くん」

すみれが極めて慎重に、静かな声で呼びかけた。

その気配を察した勇太は、ゆっくりと、しかしどこか機械的な動きで顔を上げた。彼はすみれの姿を認めると、彼女を安心させるかのように、唇の両端を吊り上げて、ずっと笑ってみせた。

「えっと…すみれさん、お疲れ様です…はは、勘違いされそうなところ見られちゃいましたね。」

だが、その笑顔はあまりにも痛々しかった。少年の端正な顔立ちには、隠しきれない濃い影と、心身の限界を示す泥のような疲れが張り付いている。

無理に作った歪な微笑みの裏で、瞳の奥だけは凍てついた刃のように鋭く、冷徹な決意を秘めてギラギラと輝いていた。その異様な皮膚感覚のギャップに、すみれは胸を締め付けられるような、じっとりとした焦燥感を覚えるのだった。



避難所の地下に位置する、臨時の作業室。白熱灯の無機質な光が、湿ったコンクリートの壁を青白く照らし出している。

部屋の中央では、鬼塚秋子が黒いライダースーツではなく、岩家製造株式会社の白い作業着に身を包んでデスクの前に陣取っていた。彼女の指先は、戦術的なプログラムの修正を一切の無駄なく冷徹にこなし、キーボードをソリッドな音で叩き続けている。

そのすぐ周囲では、岩家製造株式会社埼玉支線の工場長をはじめとする、油染みの浮いた作業着を着た職人たちが、火花を散らしながらスーツの駆動系を調整する。

金属同士が激しく擦れ合う痛覚を刺激するような重厚な高音が、狭い部屋の中に容赦なく反響し、ケレン味のある緊張感を漂わせていた。

「てっきり、おめえも前線へ乗り込むものだばかり思っていたんだがね…。」

工場長が、太い指で額の脂汗を拭いながら、怪訝そうに声をかけた。「あの男を…無理矢理にでも勇太たちの作戦に同行するもんだと、俺は思ってたからよ。」

秋子はキーボードを叩く手を止めず、冷たい画面を見つめたまま、低く、湿気を含んだ声で答えた。その胸中には、血の繋がった者同士のじっとりとした執着と、歪んだ家族の記憶が深く渦巻いている。

「過去の私なら、間違いなくそうしていたわね。あのにたり顔を殴り飛ばして、その息の根を止めるためだけに、狂ったように火の中に飛び込んでいた。」

あの男の支配はずっと…囚われていた。

それを今の私なら…、そうすれば…きっと自由になれるんでしょうね。」

秋子の瞳に、モニターの昏い光が冷酷に反射し、その横顔を浮かび上がらせる。「だけど、今は違う。」

私が本当にすべきなのは、私なんかが血を流すことじゃない。

親として、光を救い出すこと…それだけよ。

自分の感情に振り回されて復讐に走るなんて、あの男のにまだ屈しているのと同じだわ。

私はもう、どうでもいいのよ…。」

直人を殺すためではなく、光を呼び戻すための裏方に徹する。

その決意は冷徹であり、かつ一切の無駄を削ぎ落とした戦術的合理性に満ちあふれていた。

「私はもう…悔しいけど付いていけない。」

だからこそ、このスーツの調整を最後までキッチリやり切る。

あの子たちに託すのよ…。」

秋子は突拍子もない言動の裏にある愛情を滲ませながら、キーを叩いた。

画面に膨大なデータが流れ、情報の空白が高速で埋め尽くされていく。

「…だけど。」秋子は、低く呟いた。

「あんな十二歳の子供たちを戦場へ送り出すなんてのは、大人のすることじゃない。」

どう言い繕ったところで、誉められたものじゃないわ…。」

「そうだな…。」返答に、じっとりとした毒のような罪悪感が混ざる。

「最低の大人よ、私たちは…あの子たちに世界の命運を押し付けて、自分はここで油にまみれている…それでも、私は光を救う」

工場長は、それ以上何も言わず、ただ静かに深く同意するように、レンチを握り直して錆びたボルトを締め上げた。部屋には再び、容赦のない火花と重々しい金属音が響き渡り、大人の苦渋を包み込んでいった。





重苦しい扉が開ると、押し殺したような生存者達の熱気は遮断された。しかし、コンクリートの長い廊下に漂う、濡れた衣服と古い消毒液が混ざり合った容赦のない悪臭が、今度は鼻腔の奥をどろりと侵食してくる。

外の世界が今どうなっているのか、誰にも分からない暗闇がそこにあった。「…はい、これ。このくらいなら好きでしょ？私もよく飲んでたわ。」

すみれが差し出してきたのは、自販機から取り出したばかりのコーラだった。結露したアルミニウムの、肌を刺すような冷たさが、勇太の擦り切れた手の平にじりじりと伝わってくる。

二人は錆びかけたベンチに並んで腰かけた。プルタブを引き抜くと、パチパチと炭酸の音が静寂と一緒に弾けた。。

「そういえば勇太くんの学校って、まだ変な味の給食とか出る？私の時はさ、月に一度だけコア揚げパンっていう、口の周りが真っ黒になるメニューがあって…」

すみれはコーラに口をつけ、ふっと遠い目をしながら笑った。

「みんなで泥棒みたいに顔を汚してさ…先生に怒られたっけ？デジタルワールド行ったときもずっと食べたくてぶー垂れてたな。」

「…うちの学校は、きな粉ですね。」

勇太は炭酸の刺激で喉を細かく切り刻まれながら、ぼつりと言った。

「委員長がさ、いつも給食の時間を仕切るんだ。

みんなが残そうとすると、好き嫌いはダメですって、すっごく怒るから、誰も残せなくて…」

「あはは、茜ちゃんらしいわね。あの真面目さ、ちょっと羨ましいくらい。」

「そうなんです？委員長が怒るとき、誰も逆らえないんですよ…」

…なんか、全部遠い昔のことみたいだ。」

何気ない学校の、あの日々。ほんの数日前まで当たり前そこにあった日常の断片を語り合うほどに、今、彼らの足元に広がっている地獄の底なしの深さが、より一層の歪みとなって胸を締め付けていく。

ふっと会話が途切れ、またコンクリートの冷たい悪臭が二人の間に割り込んできた。すみれは缶を見つめたまま、その薄い唇を引き締めた。日常の皮膜を自ら破り、冷徹な現実を告げる。

「明日、私たちは本部に立てこもるセラフィモンへ強襲を仕かけるわ。

…だけど、勇太くん。君はもう戦わなくていい。

ここから先は、私たち…大人がなんとかする。

君はここで、お母さん達の側にいてあげて。」

その言葉は優しく、同時に少年のこれまでの足掻きを無慈悲に拒絶するようでもあった。

勇太はコーラの缶を両手で歪むほどに握りしめ、深く項垂れた。

「俺も…行きたい。」

「で…」でも。

「俺は、自分が正しいことをしているって思いたい。

戦う気持ちだってある。……でも、前にデーモンと戦った時、俺は力を奪われて、何もできなかった。

あの時は、心があっても自分の行動を証明する力がなかった…。

…だけど、今の俺には、あいつらに立ち向かう力がある。

風だって以前に比べて、手足のの延長みたいに動かせる。

なのに…なのにこの力を使って戦えば戦うほど、あの男やセラフィモンの言う通りになっていくんじゃないかって。

…俺が自分の意志を貫こうとするせいで…その代償を俺の家族みたいに、また別の誰かに押し付けるんじゃないのかって…。

光やヴォーボモン達…母さん…父さん日花…皆…みんな同じくらい大事に思っている人がいて、思われている人がいて…あんな死に方…人の死に方なんかじゃなかった…。

そう考えると、頭の中がぐちゃぐちゃになって、もうどうしていいかわからなくなるんです…。」

少年の胸の奥の亀裂から、果てのない暗い恐怖が噴き出していた。すみれは、その悲痛な少年の横顔を、胸を抉られるような思いで見つめていた。



「…実はね。私、警察をクビになっちゃったんだよね」

すみれは、自嘲気味な笑みを無理に浮かべ、わざとおどけたようなトーンで呟いた。  
くたびれた大人の女性警官が、精一杯に作ったその軽さは、かえって痛々しく廊下の静寂を震わせる。

「え…？ すみれさん、それって……」

勇太は、コーラ缶を握ったまま弾かれたように顔を上げた。  
女が誇りとしていた職を失ったという事実は、勇太の足元の地面を音を立てて崩落させるのに十分だった。  
自分のせいだ、という罪悪感が胸を突く。

(俺の、俺たちの戦いに巻き込んだせいで、彼女の人生まで狂わせてしまったのではないか…。)  
そんな怯えが、少年の瞳の奥で濁った澱みとなって揺れていた。

すみれはそんな勇太の動揺を包み込むように、細い腕を伸ばした。 耐えかねたように、  
少年の小さな頭を自分の胸元へと優しく引き寄せる。ライダースーツの硬い生地に向こうから、  
確かな大人の体温と、かすかな洗剤の匂いが勇太の鼻腔をくすぐった。

彼女の掌が、勇太の短く硬い赤髪を、何度も何度も、宥めるように撫でていく。

「警察官になるのが、私のずっと前からの夢だった。

その誇りを捨てるような選択をしたのは、他でもない私自身…だけだね、その決断が本当  
に正しかったのかどうか、

今の私にはまだ分からないんだ」

すみれの喉の奥から、乾いた、諦念の混じった声が漏れる。

「私の選択のせいで、これからの状況はもっと悪くなるかもしれない。誰かをさらに追い詰める  
結果になるかもしれない。

…ねえ、勇太君。人間の行動なんて、どれだけ考えて選んでも、どう転ぶかなんて誰にも分からないの。

例えばね、良かれと思って籠から放した鳥が、次の瞬間に猛禽に喰われることだってある。

でも、だからといって籠の中で死なせるのが正しいとは限らない。

大切なのはね、考えることを止めないこと。どんなに無様でも、その結果を自分の両足で受け止めて、  
また次の決断をしていくことだけ…。」

すみれは、腕の中の少年の温もりを感じながら、痛みを堪えるように言葉を紡ぐ。

「私も…君も自身の選択の責任がある。

君が言うように不幸にしたひとも…君が戦ったおかげで救われたひともいる…君は大勢のひとの運命に介在してしまっている。

その責任は確かにある…、ほんとにごめんなさい…君にはもう傷ついて欲しくないのに…あなたに、  
こんなに辛い決断をさせてしまって、本当にごめん。…私たち大人が不甲斐ないせいで、あなたのお父さんも、お母さんも、傷つくの止められなかった。本当に、ごめん…。

でも、君の瞳にはまだ力がある。

…辛い現実だけが君に降りかかるかもしれないけど、それでも…。」

大人の、それも信じていた存在からの痛切な謝罪と…。

勇太は、すみれの胸に顔を埋めたまま、ただじっと唇を噛み締め、その温もりに縋るしかなかった。  
だが、その光景を、通路の曲がり角の闇から凝視している、もう一つの視線があった。

茜は、両手に二つの冷えたコーラ缶を握りしめたまま、彫像のように硬直していた。日野君を少しでも慰めたい、その一心で走ってきた彼女が目撃したのは、自分が入る余地など微塵もない、  
大人の女性と男の子の濃密で排他的な空間だった。

(どうして……どうしてウチじゃないと？)

茜の胸の奥で、どす黒い感情が、まるで硫酸のように音を立てて沸騰し始め、アルミ缶を握る指先が白く変わり、爪が肉に食い込んで痛みを訴えるが、そんなものは胸の疼きに比べれば無に等しかった。  
(ウチは、委員長だから？ 同級生だから？ 子供だから、日野君をあんな風に抱きしめてあげることも、苦しみを本当の意味で分かち合うことも許されないの？ あの人には、大人の特権を使って、  
傷ついた日野君を自分のものにしようとしている…ずるい。汚い。絶対に許せん…。

鬼塚さんもそうだ…同情でただ…一緒にいたからって…。)

自分の中にある醜い嫉妬心が、濁流となって脳内を埋め尽くしていく。

感情が昂るほどに、思考は幼い頃の泥臭い言葉に染まり、どれだけ背伸びをしても、今の自分では勇太の絶望を癒やすことなどできないという圧倒的な無力感が、彼女の心を容赦なく叩き潰した。

その時、茜の脳裏に、あの悪魔的な少女、琴音の甘く粘り気のある声が鮮明に蘇ってきた。

『私たち側に付けばさー、勇太を茜ちゃんだけのものにできるよ？』

一度芽生えた暗い誘惑は、寄生植物のように茜の精神のひび割れに根を張り、急速に成長しようとする、激しい嫉妬と独占欲に身を焦がしながらも、彼女の中にある強い意志が、その誘惑を冷徹に見つめ返していた。

(あの女…安藤琴音…あんたは、ウチの心の醜い部分そのものや。)

茜は、嫉妬に狂いそうな自分を辛うじて繋ぎ止め、声も立てずにその場から逃げ出した。握りしめられたコーラ缶は、彼女の歪んだ決意の体温で、もうすっかり生温くなっていた。





避難所の最奥に位置する臨時の病室。

そこは、外の喧騒から隔絶されている代わりに、濃密な絶望が澱のように沈殿する空間だった。部屋に満ちているのは、安価な消毒液のツンと鼻を突く刺激臭と、精神を破壊された人間が発する特有の、脂汗の混じった酸っぱい皮膚の匂いだ。コンセクレーションリングという名の、おぞましい白首輪の呪縛を受けた母親達は、ベッドの上でただ生ける屍のように横たわっている。時折、脳内の狂気に突き動かされるように突然暴れ出すその肉体は、今は強力な鎮静剤によって深く眠らされていた。

日野勇太は、ベッドの脇にパイプ椅子を寄せ、力なく投げ出された母親の右手を、両手で包み込むようにして握りしめていた。

かつて、俺の頭を優しく撫でて、温かい料理を作ってくれたお母さんの手。

だが、今のその掌は、血の通わない粘土細工のように冷たくなっている。

触れているだけで、自分の手のひらから体温が、命そのものが吸い取られていくような、底知れない生理的嫌悪感と恐怖が勇太の背筋を這い上がってきた。  
(全部、俺のせいだ…。)

喉の奥に、苦い塊がせり上がってくる。

俺がデジタルワールドの預言だとか、選ばれし子供だとかいう理不尽に巻き込まれ、調子に乗って戦いなんて始めたから、お母さんは…日花は、あの男に無残に凌辱され、壊されてしまったんだ。

渡辺 直人…その男の名前を脳裏に思い浮かべただけで、勇太の全身の毛穴が収縮し、心臓が嫌な音を立てて跳ねた。あの男は、勇太にとって単なる憎むべき悪党ではなかった。

自分の家庭という平穏な城を一瞬で破壊し、最愛の母親の尊厳を泥靴で踏みじった。

そしてあの男の持つ支配的な壁…それは、セラフィモン、光を奇めていた連中も持っている内心ずっと怯えていたもの…その極地にあるもの。

あの男の持つ、暴力的で下劣な、だが抗い難い支配的なもの…父性とも呼ぶべき支配、昏く、衝動が渦巻いていた。

今戦うのをやめればそれが全世界の人に不幸として降りかかる。

いや…そんな事ではないその支配を認めることは自分の人生を逃げる事…俺は、呪縛から逃れない。

そんなビクビクと怯える生き方はできない。

「母さん…。」

勇太は、冷え切った母親の指先に額を押し当て、絞り出すように独り言を呟いた。「だけど……けどね。それでも俺は、セラフィモンやあの男が、この世界を理不尽に染め上げていくのを、放っておくことなく絶対にできない。」

…光を、見捨てる事も…例えこれが、誰かを不幸にする選択だったとしても。」

結局自分のエゴだ…だけど、それはきっと光の中にある。

ポケットの中、ボロボロにひび割れたD-3を握りしめる。手のひらに痛いほど食い込むその感触が、自分の犯してきた罪の重さのようだった。

「行くよ…母さん…父さん…日花。」

勇太は、ゆっくりと額を離した。もう、ここにはいられない。

作戦行動の時間は刻一刻と迫っている。

母親の冷たい手を放し、ベッドから一步、後ろへと身を引こうとした、まさにその瞬間だった。

ぴくり、と。

母親の、硬直していたはずの細い指先が、かすかに動いた。そして、離れていこうとする勇太の手のひらを、驚くほど微弱な、しかし確かな力で、そっと握り返した——ように、勇太には思えた。

それは、薬物の効果が切れかけた肉体の、単なる無意味な筋肉の痙攣だったのかもしれない。

洗脳の残滓がもたらした、生物としての自動的な反射に過ぎないのかもしれない。

勇太は目を瞑りその感触の意味を心で満たした。

少年の瞳の奥に、どす黒く昏い、しかし絶対的な決意の光が灯る。

その顔に色濃い影を落としながらも、迷いの消えた足取りで静かに個室を去っていった。



「すみません…遅れました。」

低い水音を立てて歩み寄ってきたのは、勇太だった。

その顔には、先ほどまで母親の病室で張り付いていた迷いや躊躇の色彩は完全に消え失せていた。何かおぞましい決意の泥濘を潜り抜けてきたような、凄惨なまでの静けさが、十二歳の少年の全身から立ち上っていた。

「日野君…!」

すみれは、その姿を認めると、胸の奥が締め付けられるような激しい衝動に襲われた。

無事に戻ってきてくれた。

その安堵は、次の瞬間、鋭利なガラス破片のような罪悪感へと変貌し、彼女の胃の腑を抉った。こんな子供を、これから始まる血と肉の飛び交う地獄へ連れて行かねばならない。

警察官としての矜持も、大人としての倫理も、すべてをドブに捨てるような選択を、自分は今、嬉しく思ってしまった…すみれは歪む唇を必死に噛み締めた。

集結しているのは、すみれの他、不気味な静寂を纏った恋夜、そして丁。

それぞれの傍らには、異形の異界生物たるパートナーデジモンたちが、雨に濡れた体躯を蠢かせている。周囲を取り囲むのは、安所が率いる陸上自衛隊の精鋭たち。

その手には雨に濡れて黒光りする戦術装備が握られ、冷徹なプロの軍隊としての威圧感を放っていた。さらに、その背後には岩家製造株式会社埼玉支社の職員たちが、重機や電子機材の最終調整に追われている。

ここには、別行動をとっている大吾と紋十郎の姿はない。さらに、源乃と宗介の二人も別のルートからの潜入を試みるため、すでに暗夜へと消えていた。

そして丁と秀人の二人は、避難所の警備のため、ここに残留することが決まっている。

情報の空白と戦力の分散。それがこれからの戦いの過酷さを物語っていた。

「待って、日野君! ウチを置いていくななんて、水臭いことせんといて!」

突如、雨のカーテンを切り裂いて、鋭い声が響いた。結月茜だった。

その背後には、細い電気火花を散らすエレブモンが、影のように従っている。

「委員長…!? いやいや危ないって…せっかく委員長の家族だって無事だったんだからこんな事に付き合わなくても…」

勇太が制止するが、茜は一步も引かなかった。

「足手まといにはならん。エレブモンの力があれば、必ず日野君の役に立てる! だから、ウチらも連れてって!」

「…ごめんなさい、勇太君…私は、一緒には行けない」

その時、一步前に進み出たのは鬼塚秋子だった。

彼女の胸中には、かつて我が家を崩壊させた渡辺直人への、血を吐くような復讐心が燦っていた。

あの男をこの手で引き裂きたい。だが、彼女は、母親だった。

感情的な復讐の狂気に身を任せるよりも、今は何よりも、光の救出を最優先にせねばならない。直人という強大な悪への執着を断ち切り、親としての責務を選ぶ。

それは、彼女が内なる父性的な呪縛と恐怖を、完全に克服した瞬間でもあった。

「私は後方からの戦術支援に回る。

厚かましいのは百も承知ですけど光を…どうか、光をよろしくおねがいします。」

頭を下げる秋子の姿に、勇太はひび割れた D-3 を強く握りしめた。あの男の幻影への憎悪が、少年の胸中で燃える。

「分かってますから顔を上げてくださいよ…秋子さん。

秋子さんの分も含めて…もし会ったら、俺がああ男の顔面を、思いきりぶん殴ってやりますよ! ついでに金玉蹴り上げてきますよ!」

それは少年の、呪縛に対する宣戦布告だった。

すみれたち自衛隊側からは、戦闘経験の浅い茜の同行に対して、即座に強い難色を示された。だが、それを覆したのは、丁だった。

「いいじゃないか。

この子の索敵能力は、現存我々のデジモンよりも優異性に長けている。

情報の遮断された今の状況ならこの子の目と耳は、生存率を最低でも三割は引き上げるはずよ。」

丁がエレブモンの頭を撫でつつ茜にウィンクで目配せした。

すみれは、茜を見つめた。

「…分かった。ただし、絶対に私達の指示に従うこと。いいわね?」

「分かりました!」

茜は短く応じ、勇太の隣へと滑り込んだ。

激しさを増す雨が、彼らの装備を、そして決意を冷たく濡らしていく。





水煙で白く霞む闇の向こうから、一人の女性がゆっくりと歩み寄ってくる。

夜間迷彩服に身を包んだ自衛隊の指揮官安所だった。彼女の顔には、この状況にはあまりにも不釣り合いな穏やかな「笑顔」が張り付いていた。

しかし、その微笑みの奥にある瞳だけは、一切の光を反射しない底なしの沼のように冷たく凍りついている。そのアンバランスさが、見る者の皮膚の裏側にじっとりとした生理的嫌悪感を這い上がらせた。

安所は勇太の目の前で足を止めると、戦術手袋のベルクロをバリバリと立てて引き剥がし、右手袋を外した。

剥き出しにされた彼女の右手は、長年の軍務により女性的で美しいものが皮膚が硬く変質し、指の関節には無数の細かい傷が刻まれている。

彼女はその右手を、まるで愛おしい我が子に触れるかのような手つきで、ゆっくりと勇太の頬へと滑らせた。

「君が日野勇太君だね？」

信じられないほど優しく、柔らかい声だった。しかし、勇太の頬に触れた彼女の指先は、氷のように冷たかった。

触れられた勇太は、その唐突で奇妙な行動に身体を硬直させ、何が起きているのか分からない、困惑きった顔を安所に向けた。

大人の、それも自衛隊の指揮官からの、意図の読めない肉体的接触。その不気味さに、少年の心臓は嫌な音を立てて跳ねていた。

しかし、先程までの底なし沼のような瞳ではなく、笑みは消えたが先ほど以上に雄弁に心を映しているように勇太には思えた。

(…ああ、この子が…これがケルビモンの選んだ子、なのね。)

目の前にいるのは、どこにでもいる十二歳の、小柄で無力な少年に過ぎない…しかし。

安所は無言のまま、少年の尊厳を静かに値踏みしていた。

しかし、その奥には別の情念が渦巻いていた。

安所はゆっくりと手を離すと、何事もなかったかのように踵を返し、背中を向けた。

「武運を祈ります。」

その声は優しく、しかし同時に、これから死地へ向かう者への乾いた告別のように響いた。

「安所さんは行かれないのですか？」

すみれが声をかける

「すみません烏藤警部補。

行きたいのは山々なのですがまだ、他にやる事がありまして。」

それだけを言い残し、安所は自衛隊の部下に激励をし、搬入口のさらに暗い奥へと消えていった。

残された者たちに、もう躊躇する時間は残されていない、激しい雨が打ちつける中、搬入口の前にアイドリング音を響かせて待機していた大型ジープが、暴風に激しく揺れていた。

「…行きましょう、皆さん。」

すみれのな声に促され、一同は次々とジープの座席へと滑り込んでいく。

車内には、烏藤すみれ、夜夜、結月茜、そして日野勇太。それぞれの傍らには、シンドウラモン、エレブモンといった、雨に濡れて異様な存在感を放つパートナーデジモンたちが身を潜めている。

さらに、彼らを護衛し、作戦を戦術的に支援するための

三人の陸上自衛隊員が、無言で銃を構えて同乗していた。

「我々の目標地点は現在発生しているデジモンが通って来ていると思われるデジタルゲート…新宿の都庁前です！

あらゆる妨害は実力を持ってこれを排除します!!!」

「可能な限り陸自内では情報共有をしましたが、自衛隊ジープである以上デジモンとは別に警察との交戦もありあえます！

覚悟はいいですね!!」

運転席の自衛隊員が、雨の音に負けない声を張り上げた。

「お願いします!!」

すみれの号令とともに、ジープは猛烈な駆動音を立てて加速した。

車輪が深い泥水を激しく撥ね上げ、ヘッドライトの光が、土砂降りの雨のカーテンを白く切り裂いていく。

「気張ってこい!!!」「死ぬなよ! 勇太!! 茜ちゃん!!!」「私の代わりにあの男の金玉潰してきてね!! あと帰ってきなさい!!!」「帰ったらまたみんなで焼きそば食おうぜ!!!」

岩家製造株式会社の職員達の声援を受け、互いの思惑と歪んだ決意を乗せた鉄塊は、セラフィモンたちの待つ地獄の戦場、都庁前に向けて魔都となった東京を走り始めた。





激しい雨が、灰色の渋谷を塗り潰していた。  
アスファルトを叩く無数の水滴は、血と硝煙の匂いを攪拌し、重苦しい霧となって立ち込めている。五感を麻痺させるような雨音の結界を切り裂いたのは、突如として響き渡った、建造物が崩壊する断末魔の音だった。

ビルの湾曲した壁面が内側から爆ぜる。凄まじい質量を持ったコンクリートの破片と、強化ガラスの微粒子が、雨のカーテンを突き破って周囲に飛散した。

「ギギ、ギギギギギッ!!」

全高十メートルを超える金色の巨躯、ヘラクスカブテリモンが、ひび割れたビルの裂け目から、飛び出し姿を現した、その巨大な角は、かつてデジタルワールドの叡智を象徴していたはずの美しさを失い、今やただの醜悪な殺戮兵器へと変貌している。

複眼には狂気の色が濁り、天使の軍勢がもたらす「絶対的な正義」という名の洗脳にその精神を完全に侵食されていた。それと組み合い、ビルの内部から肉薄したのは、大吾のパートナーデジモンであるダイナモンだった。

重厚な装甲が火花を散らし、雨水を一瞬で蒸発させるほどの熱量を帯びて駆動する。

「大吾、ここは俺様が扶け開ける!!」

大吾は、半壊した地下街への階段の陰に身を潜め、網膜に投影される戦闘データを冷徹に処理していた。通信の途絶したこの空白の戦区において、感傷は何の役にも立たない。耳を聳する雨音の裏側で、ヘラクスカブテリモンの駆動音、関節の摩擦、外殻の微細なひび割れを、視覚と聴覚のすべてを使って観察する。

昆虫型怪物の巨大な前足が、文字通り空間を切り裂く速度で繰り出された。

ダイナモンの左肩の重装甲に爪が食い込み、凄まじい火花が夜の闇を白く照らす。

チタン合金を遥かに凌駕する超硬質データがねじ切られる、生々しい破壊音が響いた。

それは無機質な機械の破損ではない。

内部から溢れ出る、粘度の高い暗赤色の体液と、熱を帯びた疑似神経組織の断片。

デジモンという生物の「肉」が削ぎ落とされる生理的な嫌悪感が、雨の湿気を通じて大吾の皮膚にじっとり張り付いてくる。

だが、ダイナモンの反撃は、その嫌悪を一瞬で消し飛ばすほどの容赦のない暴力だった。

ダイナモンは肉を切らせて骨を断つ機動で、突き刺さった敵の腕を自身の装甲ごと固定し、至近距離から右拳を叩き込んだ。

拳の表面に施された指向性ボムが炸裂する。

重低音の衝撃波が渋谷の交差点を駆け抜け、ヘラクスカブテリモンの金色の顔面が、爆圧によってドロドロに溶解した。

肉煙が混ざり合った臭いが立ち込める。

しかし、洗脳された巨獣は、痛覚を麻痺させられているかのように、溶けた顔面を振り乱してさらに突進してくる。

個人の尊厳を奪い、命をただの消耗品として扱う天使たちの歪んだ倫理観が、この化け物を動かしている。

(…反吐が出る。)

大吾の胸の奥で、冷たい怒りが静かに、しかし確実に燃え上がっていた。

彼らが騙る「和平」や「調和」の正体がこれだ。

美しい言葉で暴力を包み、従わぬ者を壊れた人形で蹂躪する。

「終わりだ。こんなところで足止めを喰らっている暇はない」

大吾の静かな呟きに応じるように、

ダイナモンが動いた。敵の狂乱の刺突を、ミリ単位の差で滑り込むようにかわす。

戦術的に計算し尽くされた最短の軌道。

むき出しになったヘラクスカブテリモンの喉元の結合部に、ダイナモンは全エネルギーを充填した両腕を突き立てた。

内部のコアを直接破壊する、致命的な一撃。

光の奔流が、一瞬だけ雨の世界を昼間のように照らし出した。

ヘラクスカブテリモンの巨躯が、内側からの崩壊に耐えかねて、夥しいデータ片の飛沫を周囲に撒き散らしながら、ゆっくりと、地響きを立てて崩れ落ちる。

光の粒子は、降りしきる雨に溶けて消えていった。

傷ついた装甲から油と熱気を吐き出し、ダイナモンが大吾の元へと歩み寄る。

大吾は濡れた髪をかき上げ、視線を遥か彼方、冷徹な静寂を保ったままそびえ立つ、セラフィモンが確認された居城崩壊したTEZへと向けた。

激しい雨は、彼らの行く手を阻むように、まだ降り続けている。





新宿の高層ビル街は、濃密な雨の帳の奥で、静かに、だが確実に狂い始めていた。歪んだ空間の狭間から覗くのは、もはや見慣れたコンクリートの景色ではない。高層ビルの外壁の一部が、まるで壊れた液晶画面のように細かな立方体のノイズに分解され、明滅を繰り返している。現実世界の肉肉しい物理法則が、デジタルワールドの構造に侵食されはじめていた。その異形の世界を、四肢を踏み締めて疾走する影があった。薄茶色の毛並みを激しい雨に濡らした…犬…デジマルだ。

彼の首輪には、光を脈動させるデジヴァイスが固着され、その小さな肉体を覆う特殊パワードスーツが、冷たい金属音を立てて駆動していた。「まったく、だらしない子ですね…そんなに泥を跳ね上げて走っては、自慢の毛並みが台無しですよ。」「ヴーッ!」

デジマルの影に寄り添うようにして音もなく並走するのは、アヌビモンだった。礼儀正しいが、どこか超然とした声音。

デジマルは走る速度を緩めず、唸り声を上げた。犬の知性において、この神聖なるデジモンはうるさい部下であり、同時に、絶対に信頼できる牙でもあった。二体の前に、空間のテクスチャを乱暴に引き裂いて、天使の軍勢の尖兵が立ち塞がる。頭上から襲いかかったのは、全身を冷徹な金色のサイボーグ装甲で固めた巨大な怪鳥…クロスモン。そして、地上で不気味に蠢くのは、ひび割れた巨大な卵の殻から、粘着質の触手と悪魔の片目を覗かせるデビタモンだった。

洗脳によって個の尊厳を奪われた彼らの瞳にも、異常な殺意が宿っている。クロスモンが金属の翼を羽ばたかせると、超高音の衝撃波が新宿の通りを駆け抜けた。並び立つビルの窓ガラスが一齐に粉碎され、破片が凶器となって降り注ぐ。それと同時に、デビタモンが生理的な嫌悪感を呼び起こす、腐敗した暗黒のエネルギー塊を吐き出した。彼らの放つ「匂い」が、自身の群れ…警視庁電捜課の仲間たちを脅かすものだと思いが理解した瞬間、犬の防衛反応は完全な暴力へと切り替わる。

鋭い吠え声一閃。デジマルはスーツの出力を最大に解放し、通常の犬を遥かに凌駕する肉体性能で、バグだらけのアスファルトを爆発的に蹴り出した。弾丸と化した小柄な肉体は、デビタモンから伸びるおぞましい触手の隙間を、ミリ単位の滑らかな機動で潜り抜ける。

「私のサポートを無駄にしないでくださいよ、デジマル!」

アヌビモンが冷徹な戦術眼で追隨する。黄金の杖が虚空を振ると、空間にピラミッド型の光の結界が形成され、迫り来るクロスモンの巨躯を容赦なく叩き落とした。衝撃が炸裂し、クロスモンの金色の装甲が、火花を散らしてひび割れる。その隙を、野生の塊と化したデジマルが見逃すはずはなかった。デジマルは跳躍し、剥き出しになったクロスモンの翼の関節部へ、スーツで超振動を帯びた牙を深く、骨を噛み砕く勢いで突き立てた。金属の擦れ合う不快な音が雨音を掻き消す。怪鳥が狂ったように暴れ、その爪がデジマルの脇腹を切り裂いて鮮血が舞ったが、犬は決して顎を離さない。

ごはんを奪われるよりも、仲間を傷つけられることへの怒りが、痛覚を完全に麻痺させていた。「そこです、動きを止めなさい!」

アヌビモンの両手から放たれた漆黒の光線が、デジマルが縫い止めクロスモンの胸部コアを正確に貫いた。巨躯が内側から黒く腐食し、断末魔を上げる暇もなく、夥しい光の塵となって爆ぜ散る。残されたデビタモンが、恐怖の代わりに洗脳された狂気で触手を振り回すが、すでに勝負は決していた。

着地したデジマルが、血に濡れた体を激しく振って雨水を飛ばし、再び突撃する。アヌビモンが展開した光の刃が、卵の殻ごとデビタモンを十文字に切り裂いた。ドロドロとした体液のようなデータが路面に溢れ出し、降りしきる雨に洗われて急速に消滅していく。「ふう…だらしない戦い方ですが、執念だけは認めざるを得ませんね。」「ヴー」

アヌビモンは静かに息を吐き、傷ついたデジマルの傍らに立った。デジマルは小さく唸り、傷口の痛みを耐えながら、鋭い視線を雨の向こうへと向けた。





地上百八十メートル、崩壊したTEZの頭頂部は、文字通りの地獄だった。

暴風雨が狂ったように咆哮を上げ、引きちぎられた雨雲の断片が、間近を超高速で通り過ぎていく。

遮るもののない超高層の屋上は、叩きつける雨水と気圧の低下が混ざり合い、露出した皮膚を刃で削るような凍傷の痛みをもたらしていた。

その破壊された展望デッキの中心に、彼は静座していた。

黄金の鎧に身を包み、十枚の聖なる翼を不気味なほど精密な同調で羽ばたかせる熾天使…セラフィモン。

その神聖な佇まいは、見る者の脳髓に直接神の威光を示すが同時にそこには、個の尊厳や命の価値を完全に排除した、冷徹な全体より大きな善という名の狂氣的なイデアだけが物質化していた。

「お天道様の下に出られねえような罪人が、こんな高いところで神様気取りかよ…!」

容赦のない、殺戮じみた暴力を伴った強襲。

数千発の重火器の弾丸と、絶対零度の冷氣波がセラフィモンの至近距離で炸裂し、超高層の頭頂部が、激しい火花と血肉を思わせるデータの飛沫で覆い尽くされた。

凄まじい衝撃波が雨雲を丸ごと吹き飛ばし、閃光が新宿の夜空を白一色に染め上げる。

しかし、爆煙の奥から響いたのは、あまりにも透明で、冷徹な声音だった。「多くを与えられた者からは、多くが求められる…この世界の調和という大きな善のため、あなた方の矮小な抵抗はここで間引かれねばならないのですよ。」

黄金の翼が、物理法則を無視した速度で一閃した。

空間そのものを圧縮したような質量波が、三つ子のデジモンたちを正面から直撃する。

「ガ、ア、ア、アアアッ!」

ズィードガルルモンの超硬質装甲が紙切れのようにねじ切れ、メタルガルルモンX抗体の兵装が内部から誘爆を起こす。

クレスガルルモンは一撃で数十メートルも吹き飛ばされ、床面に激突してデータを激しく吐き出した。

それは戦闘ではなく、天災による一方的な排除だった。

「チッ…やってらんねえな…クソが…!」

紋十郎は激しく咳き込み、口内に溢れた鉄の味をアスファルトに吐き捨てた。

涙ではなく、底知れない諦観と、それを上回る執念が彼の五感を鋭く研ぎ澄ます。

相棒たちが血を撒き散らしながら倒れる姿に、脳の奥が焼き切れるような怒りが火花を散らす。セラフィモンが静かに右手を掲げ、彼らを完全に消滅させる光を放とうとした、その瞬間だった。

「待たせた…笠水さん。」

崩落した床の裂け目から、激しい金属音を立てて跳び出してきた影があった。

大吾のダイナモンだ。満身創痕の装甲から超高温の熱煙を吹き出しながら、セラフィモンの射線上に割って入る。

さらにその背後から、血と泥に塗れたアヌビモンと、首輪のデジヴァイスを狂ったように明滅させるデジマルが、野獣の荒い息を吐きながら合流した。

戦術的な情報の空白地帯だった超高層の頂上で、警視庁電捜課が泥臭く牙を剥いて集結した。激しい雨は、今や硝煙と血の匂いを伴って、彼らの全細胞を激しく叩き続けていた。





バグに冒された新宿の空気は、冷たく、そして異様に重かった。  
源乃は、半壊したオフィスの十一階、割れた窓ガラスの隙間から、眼差しを都庁前へと向けていた。

ライダースーツの上に羽織った機動隊の服が、吹き込む雨に濡れてじっとりと肌に張り付く。

白髪の七三分けを水色のヘアピンで留めた彼女の横顔には、若々しさの裏に、狙撃手としての静寂が宿っていた。

右顔を隠すように伸びた髪の間で、鋭い瞳が標的を捉えていながら、彼女の心拍数を刻んでいた。

「ベアモン」

「現在の心拍数は八十二。」

風速、北北西に四・五メートル、大気中のノイズ濃度が上昇している…弾道の屈折率を再計算して…」

傍らにしゃがみ込むパートナー、ベアモンが、短い四肢を器用に動かして端末にデータを同期させる。

戦術的なデータの集積だけが、この情報の空白地帯において唯一信じられる錨だった。

「まったく、通信もともに繋がらねえってのによ。すみれちゃんたちは本当にここにやって来るんだろうなあ…源乃ちゃん？」

宗介が、低い掠れた声でぶっくらぼうに愚痴をこぼした。

くたびれた肉体。無精髭の浮いた口元を歪め、白シャツの襟元はだらしく乱れている。

彼の影からは、蜘蛛の脚を模した異形のデジモン、アルケニモンが、じっとりとした粘着質の殺意を湛えて都庁を見下ろしていた。

「信じるしかありませんよ、寛さん。」

あの人たちは必ず来ます。…その時は、私達がここを最高のサポートをするまでです。」

源乃は寡黙な口調のまま、大型狙撃銃のボルトを静かに引いた。

金属同士が噛み合う冷たい音が、鼓膜に響く。彼女の視線の先…かつて東京都の中枢だった都庁舎は、無残にも中央から叩き割られ、その巨躯を傾かせていた。

崩落した外壁の断面からは、配線や鉄骨に混ざって、蛍光緑色のデジタルコードの奔流が光となり溢れ出し、路面を侵食している。

じっとりとした生理的嫌悪感を呼び起こす、世界の崩壊。周囲のビル群の輪郭が時折、壊れた液晶のように細かくブレては明滅し、現実の物質がデータへと還元されていく不快な皮膚感覚が、雨の湿気を通じて伝わってくる。

そして、そのひび割れた都庁の足元に、それは存在していた。空間を円形にくり抜いたような、巨大なデジタルゲート。それは静かに、しかし圧倒的な質量を持って回転しながら、光のエネルギーを周囲に放射していた。

ゲートの縁が脈動するたびに、激しい雨が一瞬だけ空中で静止し、重力が狂ったように歪む。天使達が現実世界を塗り替え、すべてを彼らの調和に服従させるための、底知れない底無し

の穴。

その禍々しい光が、源乃のスコップを冷酷に染め上げていた。



激しい豪雨が新宿の廃墟を白く塗り潰す中、一台の自衛隊ジープが、泥水を激しく撥ね上げながら疾走していた。

後部座席の隊員たちは、小銃を乱射している。上空のバグった雲の裂け目から、洗脳されたデジモンや天使型のデジモンたちが、肉食鳥さながらの凶暴さで急降下を仕掛けてきていた。

引き裂かれる肉の悲鳴と、銃撃の火花。

葉莢が雨の中に吸い込まれるたび、死の緊張感が周囲を支配する  
「前方に障害物！止まれ、止まれ！」

運転手の悲鳴と同時に、アスファルトの濁流を突き破って、巨大な青い蛇体が姿を現した。シードラモン。

その巨躯は TEZ で遭った時より巨大で十メートルの間で歪に伸縮し、一部分を完全体のマリブルモンへと変異させながら、圧倒的な質量でジープの行く手を完全に阻んだ。

フロントが大破する凄まじい衝撃と共に、車両は強制的に停止させられる。

停止の勢いで放り出された茜を恋夜達が庇うが見事にすみれ達と分断された。

立ち込める白煙と激しい雨の向こうから、  
綺麗な立ち姿を崩さない男が、ゆっくりと歩み出てきた。

黒髪をオールバックに整え、上下黒のスーツに赤ネクタイ、楕円形の眼鏡をかけた男篠原誠司。その低い、落ち着いた声が、雨音を切り裂いて冷酷に響く。

「あれ程、痛めつけられてまた向かって来るのか？」

馬鹿なのか？その双葉みたいな髪に栄養でも取られてるのか？」

瞳を狂気に黒く塗り潰し冷淡に言い放つ。

「やっほー！茜ちゃん、ずっと、ずっと探してた的な？」

誠司の傍らから、琴音が姿を現した。

黒いマフラーのように巻き付き、

じっとりと勇太を凝視し、次に茜に目を向けた。

「前の話考えてくれたッスカ？あっだから勇太さん連れて来たッスね！」

「皆さん、手筈通りこれ以上は我々の領分です、速やかにこの戦区から離脱してください！」

「ありがとうございました…！」

「すみません…そうさせてもらいます!!」

自衛隊員たちは彼女の指示に従い、負傷者を抱えながら退路へと身を引いていく。

勇太は、掌の中でひび割れたデジヴァイスを血が滲むほど強く握り締めた。

恐怖を腹の底に沈め、勇太の足元から、鋭烈な風が渦を巻いて吹き荒れる。





轟音と共にシェイドモンが操ったビルが倒れ勇太達を茜達は分断されてた豪雨のカーテンに遮られた戦場の一角で、空気は粘りつくような緊張感に満たされていた。

外はねの茶髪を濡らし、恋夜は、鋭い眼差しを前方に固定していた。

彼の隣には、茜が座っているセーラー状のパーカーを濡らし、彼女は怯えを隠すようにして、正面の異形を睨み据えた。

ふたりの視線の先で、安藤琴音はくねくねと身体を揺らしながら、浮ついた高い声で不気味な笑みを浮かべていた。

首元で蠢くシェイドモンが、まるで彼女のねじ切られた倫理観を体現するように、じつとりと黒い影を路面に伸ばしている。

「ねえ、茜ちゃん。そんなに怖い顔をして

琴音を見ないで欲しいッス、琴音は茜ちゃんの望みを叶えて上げただけッス…あっても友達にはなりたいッスね～4人で恋バナするッス!!」

琴音はピンク色のミニスカートを翻し、わざとらしく小首を傾げた。

その瞳の奥に宿る狂気の視線は、這い寄るような生理的嫌悪感を伴って、茜の皮膚にじつとりと張り付いてくる。

「茜ちゃんも、本当は日野君のことが欲しくて欲しくてたまらないッスよね?」

それは、大切な相手の意志を完全に無視し、自らの欲求のままにすべてを支配しようとする、あまりにも歪んだ救済の誘惑だった。

情報の空白を突くような冷徹な言葉が、じわじわと新宿の闇に溶け込んでいく。

「茜ちゃん…俺はあいつと勇太、君の間に何かあったかは知らない。

でも君の目…昔の俺と同じだ…そっちに流されちゃいけない。

真っ直ぐ敵だけを見て、倒す倒すことだけを考えるんだ。」

「…はい!」

表面の勝気な仮面の裏で、内面の弱虫な自分が不条理な恐怖にガタガタと震えているのを、茜は必死で抑え込んでいた自分の弱さが侵食してくる。

茜はエレプモンを胸に引き寄せ、燃え盛るような正義と愛情の籠もった瞳で、琴音の狂気を真っ向から睨み返した。

降りしきる雨は、彼女の激しい決意を祝福するように、冷たく、しかし激しく世界を叩き続けていた。